

鹿沼の空襲、疎開児童の思い出

中津 稔・マサ子 鹿沼市

●疎開児童に同情して

稔さん…戦時中、東京の佃島から疎開の子どもが来て、上材木町の宝蔵寺の本堂に寝泊まりしていた。4〜6年生で男女50、60人くらい、雑魚寝です。

東京の空襲が激しくなり、東京が危ないというので、子供だけ疎開してきました。年配の女の先生も2人付き添って来ていました。みんな北小学校に通っていました。その頃は男女共学ではなかったから、教室は男女で分かれていました。マサ子さん…私は主人より5歳下で、昭和21年に北小学校に上がりましたが、そのときはもう戦後でしたから、学校制度が変わって男女共学でした。

私はまだ戦前に、宝蔵寺の庭で、たまに疎開の子どもを親が訪ねてきたりしているのを、結構見ました。幼い子供と離れ離れで暮らすなんて、子どもも、親も辛いですよ。

稔さん…疎開児童はかわいそうだなって。東京あたりから来ると蚊とかブユとかにさされると化膿してひどくなる子が多かった。薬はないから、

つけても赤チン（注1）しかなかった。

疎開の子で親が東京で死んでしまった子がいました。戦後2年くらいお寺にいました。先生もついていた。その後はどうしたのだろうか。

家を恋しがって4年生は泣いていたけれど、5、6年生は泣いている子はあまり見なかったね。子供同士で、上級生が下級生の面倒を見ました。

今の時代も苦しいことはいっぱいあるけど、あの戦争の時代と比べたら、問題外ですよ。

●食べるものの苦労

稔さん…大人も子どもも、みんな飢えていたよ。疎開の子どもたち、食事なんかは、どうしてたのだろうか。私は当時、宝蔵寺の近くに住んでいました。うちは畑を借りてサツマイモを作っていたから、それを蒸かして、家族に内緒で1週間に1本くらい、疎開の同級生に持って行ってあげた。とても喜んでくれた。子供ながらに、かわいそうに思っていたんです。お礼に、半紙など3、4枚もらったことを覚えています。

この当時は今のサツマイモとは違う種類で、農林20号という沖繩のイモ。今のようにおいしいものじゃなかったけど、それでも当時はうまかったよ。味はあまりないので、今なら飼料用でしょうが、しかしこれは、一個が大きいうえにっぱ

いとれたんです。

当時、食料は配給でしか手に入らなかったけど、米はほとんどありませんでした。脱穀しない、皮がついたままの小麦をゆでて食べたりしました。消化が悪いから、子どもなんかは下痢して。子どもはみんなひどかったよ。

マサ子さん…うちは農家でした。親戚の人が3家族疎開してきて、蔵や納屋に住んでいました。30人以上の家族で生活してました。私は食べ物苦労をしたことは記憶にありません。同窓会で「マサ子ちゃんのうちで、よくおさつま食べさせてもらったりしたよ」と言われましたが、あまり覚えてない。しかし、よく考えてみたら、「おさつま蒸かしといたのに、空っぽだ。またマサ子だね」と母に怒られたことを思い出しました。私、皆に大盤振る舞いしていたこともありました。それでも主人よりは、少ししい時代でしたよ、終戦後です。

農家は配給をもらえなかったんです。私は配給のパンなんかを食べたくて、親に内緒で茶碗にご飯を盛って行って、代わりに友達のうちのパンをもらったりしました。

子供は常に栄養失調状態だから、ちよつとした病気で亡くなっちゃうんですよ。いとこが亡くなった。可愛そうでしたよ。

稔さん…うちにも川口から親戚が疎開してきていた。乳飲み子がいたけど、栄養失調で、顔なんかガリガリだった。しまいには戦争中に死んだだけ。そういうのは身の回りに結構ありましたよ。家で火を燃して火葬した。

マサ子さん…その時代の葬式は火葬ではなくて、土葬がふつうです。そうもいかないから、庭の隅で自分たちでお葬式をする。そんなことが許される時代だった。今の時代には、全然想像がつかないことですよ。

●空襲の夜

稔さん…鹿沼の帝織と日本造機は軍需工場だった。それをB 29 が爆撃に来たんですよ(注2)。亡くなった人もいたし、怪我した子どももいた。空襲はひどかったですよ。私の家は燃えずにすみました。が。そのとき5年生だったと思う。

現在の墨田川の花火、あれ以上の規模です。高い所から落とすんだから。全部火が付いていた。その火が北小の窓ガラスに反射して、学校が火事かなと思っただけです。ゆっくり落ちてきて、広い場所はかなり明るくなりました。

後で学校に行ってみると、六角形の長さ60センチくらいの焼夷弾の殻が学校の庭にいっぱい落ちていました。油も流れていた。

疎開していた同級生が、焼夷弾の油をかぶって

下半身をやけどした。あとで見せてもらったが、ただれてひどかった。「熱かったんべ、熱かったんべ」とみんなに言われていました。その子は6年生まで学校に来ていたけど、その後、東京に帰ったのかもしれない。

●防空壕の思い出

稔さん…家族は防空壕に入ろうとして、坂田山、西鹿沼に行く道の切通しのところに向かいました。ここは山の斜面を利用して、道の左右にけっこう大きい穴が掘ってありました。今はもう面影は残っていません。この防空壕は50、60人がすでに入っていました。真っ暗で明かりがなく、しゃべり声だけ聞こえる。この防空壕の枕木が落ちると危ないな、というので結局、防空壕には入らず、坂田山(昔は山だった)に逃げたんです。当時、防空壕はいくつもありました。1軒で

1つ掘りましたが、そういう防空壕は危険なんです。立川の親戚は、爆弾で防空壕がつぶれて、子供5人が死んでしまいました。

ちなみに戦争中、北小には兵隊がいました。空いている教室に寝泊まりして、200人くらいいたと思います。国の命令で、山を掘って防空壕を作らせました。兵隊と民間の人で作りました。体が弱いとか、体格が合格に満たない人は招集されなかったの、そういう人は地域のために兵

隊として働いたんです。内地が戦場になった時を想定して準備していた兵器、武器を隠すこともあった山の中の防空壕もありました。

マサ子さん…うちは畑にいくつも防空壕を作りました。空襲警報が鳴ったりすると、子どもだけみんなそこに押し込まれました。崩れないように地面に穴を掘って作った、広さは2畳分くらい、深さは1.5メートルくらいでしょうか。むしろが敷いてあって、そこに大人が投げ込むように子どもを入れます。

子どもが7、8人、土臭い、汚い穴に押し込まれているんだから、みんなが集まって泣いているだけで泣いた。真っ暗で、怖くて、不安で、不安で、泣いた。私なんか年上なのに、真っ先に泣いていたと思う。当然、小さい子はみんな泣いていました。

梯子があるわけじゃなし、出たくても出られず、焼夷弾が落ちて静かになっても辺りは火の海です。だから明方になってから出してもらえたらんじゃないかな。一晩入っていたと思います。そんな思いをしました。悲惨です。戦争だけはもう、絶対にごめんだと思いますよ。

おばあちゃんもいたけど防空壕には入らなかつた。子供だけで、大人は入らなかつたですね。よそのうちのもっと広い防空壕を見せてもら

ったことありますが、掘った穴に、やはり木を渡してトタンを乗せたりして、水が入らないようにしてただけの簡単なものです。野菜の貯蔵庫として、後々まで利用していた農家もあります。稔さん・おれは泣いたりしなかった。親に、爆弾が落ちたら覚悟しろ、と日ごろから言われていた。軍国教育をしている時代だったから。空襲で表に出て逃げるときは、「そんなもたもたしてると死んじゃうぞ！」といわれて、泣いてる暇はなかったよ。

●終戦ごろの噂話

稔さん・終戦近くなると、アメリカにつかまると、ジャワとか南洋のほうへ連れていかれて、日本人がいなくなる、という噂話もありましたよ。フイリピンとかインドとかに連れていかれて奴隷にされる、女の子は売られる、なんて噂を耳にしたこともある。戦争に負けるということがわかってきたのか、いろいろな噂はありました。日本は勝っている、勝っていると言っていたけど、日本中、空襲は激しくなっていたから、口には出せないけど、負けるということは、うすうす感じていたと思います。

昔は兵隊の上に憲兵というのがいて、いろんな情報を聞きまわっていたよね。うっかりしたこと言えなかった。そういう意味でもいろいろな恐怖

におののいてる時代でした。

●東京との往復は「歩く」のみ

稔さん・叔母が東京にいて、空襲で、着の身着のまま上材木町に帰って来た。顔中炭だらけ。焼けた建物の中をくぐってきたからでしょう。電車はどうなっていたんでしょうか。

マサ子さん・東京大空襲(昭和20年3月10日)

(注3)の後、うちの父も東京(板橋)までの道を歩いて往復したと言っていました。叔母を心配して、何か家財道具でも運んでやろうとして、リヤカー引いて行っただけです。叔母の家はきれいに燃えちゃってなかったそうです。行くのに1日、帰りに1日かかったと言っていました。家に戻り着いたときにはすっかりやせきっていた。昼も夜も歩き続けて、へとへとになって帰ってきたんです。当時の人は、戦争があったから余計な苦勞をしたんですね。本当に戦争するのは、恐ろしい。

●死ぬことを当たり前として教育された時代

マサ子さん・国のために死ぬことが名誉だと教育されて、それが当たり前として子どもは大人になる。出征してもお母さんたちは泣けませんでしたが心の中ではいっぱい泣いて、否定もしていません。かわいそうでしたよね。

兵隊として戦地に行った人はもちろんですが、

兵隊に行けなかった人にも苦勞があったんですよ。父などは白い目で見られることもあったんじゃないでしょうか。地域のために一生懸命がんばったけど、それは当たり前前で評価されないわけですからね。

稔さん・私が4年生の時、たった2歳年上の近所の人で、志願して兵隊になった人がいる。霞ヶ浦の訓練所に行くと言ってたから、飛行機のパイロットになったのかもしれない。スポーツが万端で優秀な人だった。みんな北小の校門まで送って行っただけ。万歳、万歳、と言ってね。4、5、6年生がみんな校門まで送り出した。そういうことが2回ぐらいありましたね。昭和18、19年頃。帰ってきませんでした。

●朝鮮人の子どもを助けたこと

稔さん・朝鮮人が住んでいた朝鮮村というのがあった。その子どもが川に流されてたのを助けたことがあります。

新制中学に行こうとしていたが、父親の病気の薬代がかかったので、進学をあきらめてうちの建設の仕事をやることにした。ちょうど途中で、屋根に上っていたときだった。北小の西側に川がある。そこを子供がわあわあ泣きながら流れてくるのが見えたんです。屋根に乗っていたが、屋根から飛び降りて助けた。もう少しで暗渠に入ると

ころでした。意識も戻って助かった。ほかに子供が3人いて母親に知らせたらしく、母親が飛んで来ました。

あとで「私はこれから朝鮮へ帰るんだ」と言ってお礼に煙草を1本もらった。吸わないからいらなと言ったが、ほかにお礼のできるようなものがなかったんだと思います。朝鮮というのは今の北朝鮮のようでした。東武日光線の工事をやっていたのは朝鮮人が多かったと聞きました。そういう関係でそこに住んでいたのかもしれない。マサ子さん…世界中の国の人々が気持ちを一つにして、戦争だとか、自分の我を通すために相手をやっつけようなんて気持ちにならないで、平和でいてほしいと思います。

〈二〇一六年9月お話を伺ってまとめました〉

注1…赤チン

赤いヨードチンキ(ヨーチン)の意味ですが、成分的にはヨードチンキとは全く別で、正式にはマキキュロクロム液のこと。有機水銀の精製水で溶解したもので、安価で、どこの家庭にもあるような消毒薬でした。昭和46年に「マキロン」が発売されると容器の利便性や色がつかない、しみないなどの理由から消毒薬の王座を奪われました。

注2…鹿沼の空襲(建設省編「戦災復興誌」より抜粋)
昭和20年7月12日23時12分関東地区警戒警報発令、23時22分栃木地区空襲警報発令せられた。米軍機

「轟」機が7月12日23時10分茨城地区より西進県下茂木

町付近に侵入、13日2時41分を最終目標として1機乃至数機の少数編隊をもって相次ぎ分散侵入、主として宇都宮に対して雲上より焼夷弾による濃密爆撃をなし、県下宇都宮をはじめ鹿沼町、真岡町その他各地を焼夷弾攻撃をなし、13日2時48分ごろ烏山町付近より東方に脱去した。

来襲機はB29約80機高度2000乃至3000メートルにして投下弾は大型油脂焼夷弾2797個、小型油脂焼夷弾86,512個である。県内の被害状況は死者702名、重傷者315名、軽症者339名、全焼111,008戸、罹災者数51,559名。

鹿沼町の空襲は死者7名、重傷者4名、軽症者26名、焼失戸数257戸、罹災人口2490名。

注3…東京大空襲

東京は一九四四年(昭和19年)11月14日以降に106回もの空襲を受けたが、その中でも「東京大空襲」と言った場合、死者数が10万人以上と著しく多い一九四五年3月10日の空襲(下町空襲)を指すことが多い。この3月10日の空襲だけでも罹災者は100万人を超えた(ウィキペディアより)



さし絵：川田順氏

遺稿「記憶の断片から—東京大空襲のこと」(文・絵：川田順)より